

カオラマ

松原俊太郎

作者1 「上演を前提としない戯曲」を書き始める。テーマはSFと「到来しない未来」らしいが、目下それどころではない。「上演を前提としない戯曲」というのは、私の知る限り、どこにもない。シェイクスピアもチェーホフもベケットも上演を前提としていた。ベケットなら考えてもよさそうなテーマだったが、ベケットは自分の書いた戯曲の演出もしていたし、上演が、舞台が、俳優が好きだったのだろう……

作者2 お仕事は？

作者1 戯曲を書いています。

作者2 大変ですね。戯曲？ 脚本のこと？

作者1 まあそうです。シェイクスピアとかチェーホフとかね。

作者2 ああ、シェイクスピア！ ハムレット！ 戯曲って読みにくいんでしょう？

作者1 小説に比べると読みにくいだろうね。

作者2 読んだことないから読みにくいかわからない。

作者1 そうか。残念だ。ロシアの教科書にはチェーホフの戯曲が採用されているらしいが、日本の教科書に戯曲はない。小説ならまだかろうじてある。『山月記』、『こころ』はまだ使われているのだろうか。戯曲はもちろん映画のシナリオもない。国語は登場人物の心情やら作家の意図やらを読むためのつまらない授業なのだから、別に戯曲があってもよさそうなものなのに。

作者2 さっきお前が「まあそうです」と答えた脚本だが、脚本の定義は「演劇・映画などの上演のもととなる、台詞・装置、演出上の注意などを記したもの。映画ではシナリオともいう。台本、台帳。」（大辞林）となっていて、上演台本に近い。戯曲の定義は「劇の上演のために書かれた脚本。また、その形式で書かれた文学作品。台詞に、人物の動作や舞台効果など、演出に関する注意（ト書き）を加えたもの。日本・外国ともに、その形式が確立したのは近代以後であるが、謡曲、あるいは浄瑠璃の丸本や歌舞伎の台帳などもその一種であるといえる。[dramaの訳語として広まった語]」（大辞林）となっている。

作者1 驚愕の事実だ。脚本は戯曲に含まれている。そういえば舞台を観終えたひとが「ホンが悪い／いい」と言うのをしばしば耳にするな。戯曲＝脚本というわけではないが、も

しひとに、戯曲って脚本のこと？ と訊かれれば、「まあそうです」じゃなくて、ええ、そうです、と言わなくてはいけないし、わざわざ小難しいよく知られていない戯曲なんていう言葉を使わず、はなから脚本を書いていますと言っても間違いではないということだ、定義上は。

作者2 戯曲は演劇の上演のためのテキストで、脚本は映画やドラマのホンというのはどうだ。脚本はト書きがあつて、人物名の下にかぎ括弧つきで台詞が書かれていて、過剰に会話であることを強調している。

作者1 なんとか協会が書式を規定してるんだろ？ 好きに書けばいいんだよ。クレジットを見てみると、演劇作品では「作」あるいは「原作」、映画やドラマでは「脚本」となっている。戯曲はいったいどこに存在しているのだろうか。文芸誌などに戯曲が掲載されると、「戯曲 ○○」とクレジットされる。戯曲は文芸誌の中にある。狭い世界の話になるが、一九八〇年代以後、野田秀樹や平田オリザが戯曲と演出を兼ねるいわゆる「作演」というスタイルをとり、それに追隨した者たちもまた「作演」をし、そこで出来上がったテキストは「戯曲」とも「上演台本」とも呼ばれた。白水社が主催する「演劇界の芥川賞」とも呼ばれる岸田國士戯曲賞では、候補作の要件として「原則として一年間に雑誌発表または単行本にて活字化された作品とする。ただし、画期的な上演成果を示したものに限り、選考委員等の推薦を受ければ、生原稿・台本の形であっても、例外的に選考の対象とすることがある」としているが、最近のノミネート作を見てもほとんどが「作演」の作家による「上演台本」である。この上演台本と戯曲の線引も曖昧なのだが、おそらく上演のための稽古で書き進めたあるいは改変してできあがったテキストが上演台本、上演とは距離を置いて、稽古前に仕上げられたテキストが戯曲とされている、のではないか。

作者2 「上演・演劇・演芸などを舞台で演じ、人々に見せること」。そのための戯曲。

作者1 気になるのは大辞林の「戯曲」内の「その一種であるといえる」という微妙な言い方で、すぐに思い浮かぶのはアートのことだ。「アート…芸術。美術。」なんと簡潔な。それでは芸術は。

作者2 「芸術…特殊な素材・手段・形式により、技巧を駆使して美を創造・表現しようとする

する人間活動、およびその作品。建築・彫刻などの空間芸術、音楽・文学などの時間芸術、演劇・舞踊・映画などの総合芸術に分けられる。②芸・技艺。わざ。」

作者1 大雑把だな。芸術とは何かという退屈な問いはデュシャン以降、もう嫌というほどなされてきたことだが、戯曲とは何かと問うことはあまりなされておらず、「その一種」がたくさんある。丸本、歌舞伎、ドラマのシナリオ、上演台本、映画の脚本、舞台の脚本、上演のためのテキスト……こうなると、「上演を前提としない」テキストを戯曲に含めたって何の問題もなさそう。あまりに茫洋としていて、呆然としている。そしてそもそも「戯曲」という単語自体があまり知られていない。たぶん『ハムレット』とか『かもめ』のほうが知名度は上だ。誰だってアートは知っているし、そこらじゅうアートだからで、本当はそこらじゅう戯曲だらけなのだが、「戯曲」という単語は使用されない。死語。マイナーな単語。使用頻度、認知度といった指標ではもはや脚本、台本が勝っている。戯曲は片田舎に隠遁し、忘れ去られた親のようだ。さつき簡潔に定義したばかりなのに、もう負けそう。

作者2 打ちひしがれるにはまだ早い。迷ったら元の道に戻れ。

作者1 それでは「上演を前提としない戯曲」を考えてみよう。定義には、脚本にも戯曲にも「上演のもとになる」「上演のために」と書かれるものが「戯曲」だと、ザ・ギキョクだ、と、ある。もはや定義なんてまったく信用していないが、辞書の定義を信じてやまない方々にとっては「上演を前提としない戯曲」というのはナンセンスな代物であることには違いない。

作者2 なぜ、わざわざ、そんなものを書かなくてはいけないのか。

作者1 依頼されたからとか、何のためになる、とかいうのはやめよう、悲しくなる。それでもなお私はいま、「上演を前提としない戯曲」に立ち向かおうとしているのだ。そんなものはナンセンスだと言われようが言われまいが無視されようが誹謗中傷を受けようが、それでもなお私はそれを書くのだ。

作者2 抵抗の身振りを見せてくれるのは結構だが、もっとちゃんと考えて。

作者1 お前はいつも励ましてくれるだけだな。気が重い、現状を戻ろう。現代演劇界

で何よりも強いのは劇場で、次が劇場に所属するスタッフ、次が劇団、次があってもなくても構わない戯曲。演劇という枠自体も揺さぶられて劇がアート界に、美術館に、ライブハウスに、街に出ていくなか、劇場は権威を保つためにも、新作戯曲なんか金を払っている場合ではない。劇作家の居場所はない。ドイツやロシアやイギリスには演劇学校にも劇作家コースがあるのかもしれない。日本にはない。高校でも大学でもみんなまずは俳優から始めてその中から演出をやりたい人、演出家が出てくる。劇作家は冬の真夜中に突然やってきた異星人みたいなものだ。ヨーロッパにはあるらしい「ポストドラマ演劇」なるものにおいてテキストは上演における一要素であり、そこからイメージや構想や時間や空間のきっかけが見つかればよいのであって、戯曲など必要されていない。寺山修司が近代戯曲に反抗してやったことだ。「何よりもまず、演劇の〈文学ばなれ〉が必要です。そのためには、演劇の内側から戯曲を追放しなければならぬでしょう」……

作者2 「文学」的なヴィジョンを持った劇作家と、そのヴィジョンを具現化する演出家と、「内的な自然」をリアルに表出できる俳優と、美術家と、音楽家と、衣裳家と、多くのスタッフとが協同して作った劇に、夜な夜な劇場に集った観客が熱狂し、同一化し、革命の夢を見た。ロマン主義。未来派。ロシア革命。ファシズム。

作者1 いま、私たちは人と似ていることに怯えている。

作者2 第二次世界大戦終結後、もはや演劇の呪いのような存在たるベケットは名高い小説三部作『モロイ』『マロウンは死ぬ』『名づけえぬもの』の「息抜き」に戯曲『ゴドーを待ちながら』（一九五二）を書いた。近代戯曲における物語と登場人物の嘘は見事に暴かれ、突然、現代演劇が始まった。

作者1 映画と二人三脚でね。演劇には時代とともに変転していくリアリズムしかないが、映画には編集がある。A地点にいたひとがいつのまにかB地点にいる。これを映画なら容易に示してみせるが、演劇では見立てを観客と共有しながらでないと示せない。映画の編集を知っている観客は舞台の転換を待ってくれない。演出の手管をすべて明るみに出したうえで、スペクタクルでないと観客は笑わない。

作者2 カメラ、フィルム、サイレント、トーキー、ビデオ、スマートフォン、ドルビー、

3D……映画は常に技術と金と観客の知覚ともに進んできた。では演劇は？

作者1 ピーター・ブルックによれば「ひとりの人間がこのなにもない空間を歩いて横切る、もうひとりの人間がそれを見つめる」だけで演劇行為は成り立つそうさ。

作者2 演劇は舞台と俳優と観客で成立する。

作者1 レッシングによると「戯曲において、時間を決定するのは、実際にそれを舞台上で演じる身体である、あるいは身体こそが演劇の時間を決定する」のだそうさ。

作者2 戯曲は時間を決定しない。劇作家はまだ身体の限界を知らない。

作者1 映画にはカメラのフレームがあるが、演劇には観客の目のフレームしかない。

作者2 演出家は観客の目のフレームと同一化する。

作者1 真か偽かわからないけれども、目に見えるものがたしかに見えていて、そのもの発する声がたしかに聞こえていて、そこにあるとされるものがたしかにあると感じられる経験は演劇に特有のものだろう。演劇といえば劇場の内であろうと外であろうとやはり舞台上の上演であって、観客には不可逆的な時間の中で見聞きし、知覚する経験こそが欲望されている。

作者2 「上演を前提としない戯曲」は多分にナンセンスかつ反社会的な代物だ。

作者1 もはや「戯曲」も「上演を前提としない」も弱々しくなってきたところで真っ先に浮上してくるのは小説かな。

作者2 小説は読者に読まれることを前提としているが、上演は前提としていない。でも、これは小説だ、と思われたら、私たちのこれまでの対話は無になる。次だ。

作者1 論文、手紙、電話帳、呟き、ブログ……素材だな、ポストドラマ寺山だ。

作者2 いつまでたっても終わらない。うだうだ言っただけで、さっさと書け。

作者1 もう書いてしまったのです。演劇計画Ⅱのホームページに赴いていただければ、昨年発表した戯曲『カオラマ』第一稿が無料で読むことができます。クリエイティブ・ライセンスで無料で上演・改変して発表・二次創作・好きなように使ってよいという体裁で発表したのですが、現時点ではそのようなことがなされたという報告は受けていません。

作者2 ああ、登場人物たちにはかわいそうなことをした。顔、女、医者、フリッツ、ウイ

リー、ゴンゾ、立ち上がった人たちは上演されるかどうかも、そこが戯曲上なのか現実なのかも知らずに永遠に第一稿に閉じ込められたままだ。

作者1 そう、だからいま私は慎重に事を進めている。

作者2 考えなしに行動しないというわけか。

作者1 もう行動は始まっている。私たちはすでに戯曲の中にいる。考えながら歩く、そしていざれ出口を見つけるんだ。

作者2 お前の散歩に付き合うのは疲れたよ。

作者1 焦らないでくれ。死に急ぐな。

作者2 ここでのんびり死んでいくのもいいだろう。

作者1 お前は無人島で死ぬわけじゃない。ここにはもうすでにたくさんのお客がいて、お前を見つめている。

作者2 よくやっているとと思うよ。

作者1 シェイクスピアの『真夏の夜の夢』の上演を観たヘンリー・ミラーがさ、カフェ・ドームに立ち寄って友人とおしゃべりしてたんだ。それで「実際のところぼくらはその戯曲以外のあらゆることについて語り合ったんだが、談話を生み出したのは戯曲であり、談話のなかで鮮やかによみがえったのも戯曲であり、ぼくの心のなかでは、この談話のなかでよみがえったものこそが『真夏の夜の夢』という作品であつたし、いまもそうなのだ。

創造されたものというのは、すべてこんな風に存在するんじゃないか——あとで生じた効果のなかでのみ存在するんだ」ってさ。

作者2 それで？ 登場人物は閉じ込められず、効果として外に出ていけると？

作者1 ああ、でもこれは上演された結果だ。あるいは観客が含まれている。

作者2 読者の心のなかで生きつづけると？

作者1 何が言いたい。

作者2 ロマンチックだな。

作者1 違う、戯曲は劇作家一人によって書かれるものではないということだ。戯曲を上演する劇団、演出家、俳優、劇場、そして観客とともに書かれるものだ。もちろん、あてが

きという手法もあるが、あてがきは上演台本に近い。

作者2 それは上演を前提とした考え方だ。上演を「前提としない」なら、私たちはひとりで書かなくてはいけない。観客もなしでだ。

作者1 孤独だな。

作者2 作家は孤独なんだ。

作者1 もういい、もういい、『カオラマ』の第一稿には登場人物が登場し、この第二稿には現時点で作者である私たちが登場しているが、愉快的登場人物たちと愉快でない私たちは俳優に演じてもらうための人物たちではなく、ただの戯曲の人物たちである。戯曲は上演のためにあると言われるのなら、上演してもらってもかまわないし、私たちだってできれば上演されたものを見たいと思っている。

作者2 そうだそうだそうだ！

作者1 ただ、私たちは上演のために書くということをしていないだけだ。そもそも上演のあてがないのだから、それは簡単なことだ。この戯曲には上演のあてがない。上演を「前提としない」のではなく、上演されることがない。悲しい気分にはなるのはよそう、私たちは冷蔵庫からアイスクリームを取り出して、その先端を舐めながらこれを書いている。

「上演を前提としない」など、なんでもなかったのだ、どうでもいいことだったのだ、「創造されたものは、あとに生じた効果のなかでのみ存在する」んだ！ 前提するもしないもそんなのは威勢のいいただの態度表明で、本来、私が決めることではなく、この戯曲を使うひとが決めることだ。私たちはこれは戯曲であると言いつながら書いているが、それもまたどうでもよい。これは戯曲ですか？ と問うのが正しい。

作者2 そんな投げやりな姿勢で書かれたものを誰が使うというの？

作者1 そうだよな。登場人物も物語も作者も私も信じられないよね。読んだときはまあそうだよな、そういう物語風味加えるよな、と同情しながら読んでいることもあるが、実際は登場人物も物語も消費されまくっている。ルミエール兄弟の電車にびびった観客のように、ボヴァリー夫人に眉を顰めた読者のように、クレマーからポリティカル・コレクトネスを盾に、あるいは自分たちの壮大な信条を鈍に食いかかってきてもらえればめっけ

もんで、何よりも怖いのは登場人物も物語もただ消費されて無関心と忘却の波にさらわれてしまうことだ。書く前からみんな怯えている。だったら書くな、とクレイマーが白目を剥いて呟く。本当にそのとおりだ。私だって疑心暗鬼になってトランプ支持者やネットウヨになろうってもんだ。でも彼らは世界の中心を信じて疑いたがらない。自分が信奉しているものは絶対だと言い張る。それが自分を信じることもなって、少しは安定した基盤を得られるというわけだ。ただこれはあまりにもおめでたい一部の人であって本当はみんな疑っている。夜に一人になってみるとやっぱり自分しかいない、その自分を支えているものが崩れ去ったら？ 忘れて次の信じるべきものにすがりつけばいい、どうして私があるなペテン師野郎の愚政のケツを拭ってやらならんのだ、私はただ一票入れてやったただけだぜ……

作者2 お前にやけになられると私が困るんだよ。

作者1 あいにくそんな倫理観は持ち合わせていないんだ。

作者2 ひとは自分の知っていることだけで私の現実を構成する。

作者1 自分の知っていることが通用しない出来事がやってきたら？

作者2 否認するんだ。それは現実ではない。

作者1 私たちをじっと見つめて、あなたの新たな現実に取り込んでほしい。

作者2 私たちはただ書いているだけだ。

作者1 そうだ、疑いようのない事実だ。自分が信じるに足る登場人物を、物語を、出来事を、言葉を、声を書き連ねるだけだ。ニーナもハムレットも神も死んだいま、新しい聖

書が求められている？ 物語を信じたことのない私が、物語の中に一つでも信じるに足るリアルを書き込めればいい。フィクションだろうが実話だろうが、それを信じうる強度があればいい。そうでしかありえない現実が目の前にあればいい。文字にそんなことが可能だろうか。こうでしかない単語をこうでしかない順序で並べ連ねていくことだ。何をどのようにして書くか。結局、戯曲だろうが小説だろうが過去の偉大な作品が創造した形式を借用してそれをたまたま戯曲あるいは小説と読んでいるに過ぎない。私の頭から出てくる文章はすべて紋切り型で、それをここで戯曲の形式に当てはめていけば、普通の戯曲がで

きあがる。そのことを意識した私はその紋切り型を破壊しようと思えば、少しは私の頭の中の紋切り型からは離れられるだろうが……

作者2 どうしたどうした！

作者1 私は書かない。

作者2 うん？

作者1 私は書かない。

作者2 私も書かないよ。

作者1 口述筆記、自由連想法、カットアップ、プログラミング、全部不採用だ。

作者2 そんな話したっけ？

作者1 これまでの話はすべて私たちの書く方法、すなわち生の技法をめぐるものだ。

作者2 それで誰が書くんた。

作者1 現実だよ、記録だよ、実話だよ！

作者2 構成もしないど？

作者1 現在進行中のお話をそのまま捕獲し、血抜きし、血を返すんだ。

作者2 どうやって？

作者1 耳をすませば。

作者2 聞こえないね。

作者1 私には聞こえる。

作者2 聞こえない。

作者1 そういうものだ。

作者2 これは実話であり、事実であり、真実である？

作者1 これは生きているものたちの記録である。

暗闇の中に四角い透明な箱が置かれています

赤外線カメラで撮影された映像を見ると、暗闇の中に緑色の立方体の線が浮かび上がってくるでしょう。箱の中にはデジタルの目覚まし時計と二本の丸太が置かれています。

時計には二〇一八年八月一日、九時〇〇分と表示されています。

丸太の概要は 杉、幅二・五三メートル、直径〇・七メートル

檜、幅二・八〇メートル、直径一・三メートル

あなたたち登場人物は保護されました。安心してください。

これは現実です。

あなたたちがいまに触れるとき、その接点にある物が現れます。

あなたたちの会話は保護の観点上、すべて箱の上面に黒字で記録され、あなたたちの運動の軌跡は黒い線によって記録されます。

女1 (転がりながら) どうして……いる、暗い、透明な箱？ 私、夢？ 横になって？

(檜の丸太にぶつかると) なに？

女2 ご丁寧なご説明をどうも。

女1 誰？ 誰に言ってるの？

女2 神様！

女1 変なひとにぶつかっちゃった。ごめんなさい。逃げなきゃ。

女2 私は丸太。そしてあなたも丸太。

女1 ほんとうに変なひとに絡まれちゃった。こわい。

女2 よく聞いてね、ここにはいまのところ、丸太が二本あるの。私たちの他には誰もいないの。つまり、私たちは丸太。

女1 私は人間。

女2 私もさっきまで人間だった。たぶん。

女1 丸太に変えられちゃったっていうの？ 魔法使いの杖で？ 3Dプリンターで？

女2 少なくとも見た目は丸太。

女1 私は認めない。

女2 丸太の外に別の私がいるみたいな言い方ね。

女1 あなたはもう自分を丸太に明け渡しちゃったわけ？ 愛してもないのに明け渡し
ちゃったりして恥ずかしくないの？

女2 私は丸太じゃない。でも、いまは丸太の中にいる。

女1 芋虫なの？ 見てみたいわあ。目は見えるのかな。見えないとやだ。光あれ！

明るくなります

女1 なにこれ、よかった……見える……しかも全方位！ あなた、丸太？

女2 あなたは檜で、私は杉ね。

女1 くだらねえジャンル分けしやがって！

女2 あんまり怒ると焚き木になっちゃうよ。

女1 煙になって昇天できれば――

三秒経過 暗くなります

女2 けちな神様。

女1 節電ですか？

プライバシー、保護 プライバシー、保護

女2 悪い夢ね、きつと。現実じゃない。

女1 夢なら醒めて。お願い、私の現実を返して。

女2 自分たちで何とかするしかない。

女1 いやに前向きすぎ。

女2 あきらめがきたら終わり。

女1 スポ根、嫌い。

女2 こういうときはスポ根が一番よ。たしかなのは、私もあなたも生きているということ。と。二人いるんだから、少なくともそう言うことはできる。

女1 丸太に生きてるも死んでるもないわ。

女2 上に字が書かれてる。

女1 私たちの血迷った会話をどうしてわざわざ？

あなたたちは保護されています

女2 余計なことを。

女1 この場所、どっから借りてきたの？

ここはあなたたちを保護するための場所です

女2 頼みもしないのにね。

女1 丸太のどこが目で口で耳なの？ 手と足は？

女2 分からない。触って確かめることすらできないんだから。

女1 ひとつひとつ丁寧に潰していきましょう。

女2 そうね、私たちは登場人物らしい。

女1 あなた、俳優なの？

女2 しがない娼婦よ。

女1 なにそれ。

女2 でも、今は俳優の丸太。

女1 でも、どういう意味？ 生まれたときからあなたはあなたの人生の登場人物です？
それとも…

女2 ここは小説とか映画とかの舞台で私たちは登場人物なんじゃない？

女1 思い出した！

女2 やったね！

女1 八月五日の晩に友だち五人で映画観に行ったのよ。あなた、あなた……あだめ、君死にたまふことなかれしか浮かんでこない、友だち五人中二人がその映画に出てる助演俳優の大ファンでね、まあどんな映画でも観るに越したことはないから付き合ってみたわけ。映画が始まって三十分くらいまでかな、登場人物の女二人と一人の男が四通りの組み合わせで遊んで、そのたびにギャツキギャツキ馬鹿笑いしてるの。真夏の日曜日の晩に五人でいったい何を観てるんだろうって思うじゃない。でもまあ女の子が気持ちよさげにいたたいビートに乗って踊ってるのか美しいのよ、大ファン二人はその女の子になつたつもりで助演と遊んでる気分を味わってたし、登場人物たちはそのまま何も起こらない平凡な日常煉獄のなかでただらだと生きて、馬鹿笑いしつづけてればよかったのに、そこから物語をおっぱじめちゃったの。バイト先のめんどくさい上司と喧嘩したり、三人の中で関係の取引をしたり、お母さんが病気になったり、おセンチなモノログ入れたり、それがまあ見事にどうでもよくて、登場人物が横断歩道渡るたびに友だち五人みんながみんな轢かれろって思ってた。ヒツチコックなら、フラナリー・オコナーなら絶対に轢かれてた。

女2 誰が君死にたもうことなかれよ。

女1 特に主人公のだからしない優男ね、もういい、お前は死んでいいってみんな思ってた。

女2 裁くなかれ。裁かれざらんためなり。

女1 みんなが轢かれろって思うってすごくない？ 物語らしい物語始めちゃったばかりにこれだもの、死なないならそれなりの生き様を見せろとか私たちほんと何様って思うけど、観客様なのよ、血塗られた金払って見てるわけ、物語も登場人物も信じさせてくれないならどっちも消去すべきじゃない？

女2 一瞬でもそこにたしかに彼らがいるって思わなかった？

女1 思ったわ、いい俳優もいたから。でも三分後にはふつうの物語とそれ相応の演技に裏切られた。登場人物たちは物語から逃げるためにもっとしゃべるか沈黙するか、死なない

ためにはち切れんばかりの感情から生み出した紋切り型を力の限り叫ぶか、観客の前提を覆す優雅な運動を見せるかすればよかったのに、何もしなかった。監督と俳優は登場人物を生かそうとしていた。登場人物の生き死には外の意志に支えられていたのよ。

女2 いまふうの権利の濫用ねえ。

女1 それが本当にかれらの物語だったの？ 残念ながら暴力のほうが断然リアルだった。

登場人物たちは車には轢かれなかったけど、物語に閉じ込められたままである。物語はつづくのにつづかない。そして、くだらないってみんなに罵られた。

女2 ぜんぶ私たちの話みたい。

女1 私たちは丸太にされた。リアルな暴力はこれっきりにしましょう、ね、神様。

沈黙

女2 物語を始めなきやいいのね。

女1 物語は始めるもんじゃなくて始まっちゃうのよ。神様と物語の引力によって。

女2 物語が引きずり込もうとする道を常に頭に入れておこなきゃ。

女1 だらだらと、気まぐれで、退屈で、脈絡なく、沈黙なしでしゃべりつづけること。

女2 死なないために。閉じ込められないために。

女1 あとは何が起きようがかまわない、このまま何も起きないのが一番恐ろしい。

女2 でもどうして私が？ 私は観客側の人間で俳優でも何でもないのに。

女2 保護するためだって。

女1 私に何があったの？

沈黙

女1 丸太の一生ってどこで終るのかしら。

女2 焼かれるか朽ち果てるか、灰か土か。

女1 なぜ？ なんのために？

沈黙

女2 神様はいないみたい。

女1 神様に感謝するのをやめて他者に感謝するところから近代は始まったし、神様が私は人間でした一人の他者でしたええずっとそうでしたって認めたところから日本の敗戦後が始まったんでしょう？

女2 それは歴史の話でしょう。感謝とか善意とか正義とかが通用しなくなっただけいまここ。

女1 ええ、それでも、いいと悪いはある。神様は私たちを適当に振り回して適当に編集してそれらしい物語に仕立てあげて新しい聖書でも作って新興宗教を興そうって悪い魂胆をお持ちなのよ、だって、上見てみなさいよ、「女1」「女2」よ？ ばっかみたい。

女2 どうして「杉」「檜」じゃないんだろうね。

女1 保守的な神様なのよ。誰が誰だかちゃんんとわかるようになって、ばっかみたいって言ってるの。

女2 だそうです、神様。

女1 私を代表するものが「女1」？ ああやだよだ、どれだけ女に苦しめられてきたか、あんたにはわからないのよ。

女2 でも表示を変えたって丸太は丸太なのよね。どうでもいいわ。

女1 そうね、ほんとそう、どうでも。

女2 いま私たちは他の誰も考えたことのないことを考えている。誰も自分が丸太になったらどうしようだなんて考えない。

女1 私があんたにも怒ってるって考えたことはない？

女2 謝る。とにかく謝る。ごめん。

女1 なぜ謝ってるの？

女2 あなたが怒っているから。

女1 どうして私が怒っていると思う？

女2 わからない。

女1 ちょっとは考えなさいよ。

女2 考えたくもないわ。

女1 くそつたれ！

女2 丸太が自然発火しちゃうよ。

女1 暴力よ、こんなの暴力よ。

女2 いきなり丸太にするなんて……ひどいよね。

女1 どうして私なの？

女2 私とあなたの物語、「あなたたちの物語」って言ってたね。

女1 私とあなたは何の関係もないの？

女2 私たちはどこかで会ったことがあるのかもしれない。

女1 お願い、ラブストーリーは勘弁して。神様に便乗して勝手にはじめないで。

女2 できればちゃんと顔とからだを持ってあなたに出会いたかった。

女1 それでも何も始まらないわよ、私、あなたのこと嫌いになりはじめてるもの。

女2 勝手にはじめないで。

女1 いま何時？ 私たちは何時何分に始まったの？

女2 さっき見たときは二〇一八年八月一五日九時一〇分だった。

女1 私が丸太になる異常事態発生中でも時間が平然と流れていくなんて、絶望した。

女2 もしかしたらあっち側の時間は止まっているかもしれない。

女1 私たちのいまは現在？ 過去？ 未来？

女2 現在じゃない？ そう思わなきゃやってられない。

女1 おうちに帰りたい。

女2 帰る場所なんて、あるのかな。

女1 こわいこと言わないで。私たちが生まれ育った街が地震やら爆弾やらで消え去って雑

草も生えてこないお庭になりました、そうして私たちはなぜか丸太になりました？

女2 むしろそう考えたほうが安心するね。帰る場所なんてない。

女1 じゃあ作りましょうよ。

女2 「神は、彼らを地の表面あらゆる所に離散させ、そうして彼らは街を建設することを止めた」

女1 いったい、私が、何をしたっていうのよ！

かつてあったことは、これからもあり、かつて起こったことは、これからもまた起こります

女2 神様っぼい。

女1 いままで私は一度だって丸太になんかならなかった。

女2 別の誰かは丸太になったのかもしれない。

女1 だから私たちが何をしたっていうのよ。

約七千年前、縄文人はムクノキをくりぬいて丸木舟をつくり、海に浮かべました 五三三
年、ビザンティン皇帝ユスティニアヌス一世により発布された全五〇巻の法典『学説彙纂』
には「なんぴとも自分の手足の所有者とはみなされない」と書かれています 一九三〇年八
月七日インディアナ州で白人たちが二人の黒人をリンチした挙げ句に木に吊し上げた事件を
受けてエイベル・ミーアポルは「奇妙な果実」という曲を作りました 第二次世界大戦中の
一九三九年から一九四五年まで日本の七三一部隊は満州国の軍事施設に収監した捕虜を「マ
ルタ」と呼び、人体実験の道具として使用しました ひとは木視率が四〇%から五〇%の空
間にいると安らぎを感じるそうです 二〇二〇年開催予定の東京オリンピックのための再開
発によって公園の樹々は伐採されつづけています 国立競技場の建設にはマレーシアのボル
ネオ島サラワク州の先住民が暮らす熱帯雨林の樹々を伐採したシンヤン社の合板が使用され
ています

女1 だから何した。

女2 どうして丸太なの？

一八八九年、杉は屋久島で生まれ、人間と斧によって伐採されましたが、運搬中に海に落下し、ここに漂着しました

一九一五年、檜は木曾で生まれ、伊勢神宮の式年遷宮に備えて人間と斧によって伐採され山土場に保管されましたが、洪水で流され、ここに漂着しました

女1 答えになってない。

人間は丸太を作り出すことで船を作り、家を作り、拷問器具にし、椅子にし、丸太と密接な相互関係を形成してきました

人間は丸太を持ち、丸太は人間を持っています

女1 もういい。

女2 省略だらけの作り話よ。

女1 百年以上も生きてるのねえ。

女2 たくさんいろいろなものを見てきたんでしょね。

女1 このまま丸太のなかにいたら私たちも死ねないね。死にたいわ。

女2 不死の身であればこそそう言えるの。何度でもことあるごとに言えばいい。

女1 おうちに帰りたい。ここは日本のどこかなの？

ここはどこでもない場所です

女2 言うと思った。

女1 私たちが丸太にされたのは誰のせいでもないわけ？

「された」のではなく、あなたたちは丸太なのです

女2 洗脳よ、耳を塞がなきゃだめ。

女1 丸太は耳を塞げないの。受難して沈黙することしかできないの。

女2 人権を持ち出してみても始まらないわけね。

女1 何の権利もない、ただ、ここにいるだけ。過ぎ去るに任せるだけ。

女2 丸太のまま、過ぎ去るに任せる？

女1 退屈だよな。

女2 あなたと話しているのは楽しい、神と話しているのは楽しくない。

女1 私は退屈。

女2 気を取り直して、最初に戻ってみましょう。

女1 上を見上げる気力もないわ。

女2 「あなたたちがいまに触れるとき、その接点にあるものがここに現れます」

女1 神に試されてるみたいで癪に障るけど、国語の授業、受けて立とうじゃないの！

女2 じゃあまず「あなたたち」。

女1 ひとまず、私とあなたね……誰か来て！

女2 落ち着いて。「いま」。

女1 これは私たちにとっての「いま」ってことでよろしいですか？

沈黙

女1 私たちのいない「いま」なんて興味ないわ。

女2 一億二六五〇万人のいま、アメリカのいま、世界のいま、宇宙のいま……

女1 どれも私たちにとっての「いま」とでしか私たちには判別できない。

女2 でも、私たちの「いま」は二つある。いまここにいる丸太の私と、どこかにいるから

だの私の「いま」。

女1 からだの私は沈黙してる。

女2 「いまに触れる」。

女1 丸太のまま？ 手も足もなしで？

女2 そう。私たちが持っているのは意識と声と言葉だけ。

女1 もう十分すぎるほど丸太の私の「いま」には触れてるよね。

女2 時間、感じる？

女1 点滅してる時計を見ればね、グリニッジ標準時か、いつどこの時間か知らんけど、あ
あやりよるやりよる「いま」が連なりよるわ……って思う。

女2 私たちは丸太の中にいるのよ。

女1 丸太の時間？ 百うん十年生きてきたんだもんねえ……

女2 丸太は私のからだじゃない。丸太の私では何も過ぎ去らない。

女1 私が丸太をからだにすれば丸太の時間も感じられるようになるかも。

女2 それ、やる？

女1 私に必要なのは、私がこれまでいっしょに過ごしてきたからだで、丸太じゃない。

女2 からだのあるところには時間はやってこない。

女1 でも、からだの私は意識不明の重体。

女2 意識がからだを見失ってるのかもしれない。

女1 何か事故があって、意識だけふわふわ幽体離脱しちゃって……

女2 私たち、夢、見てるのかも。

女1 間違いなく悪夢だわ。

女2 悪夢なのよ。

女1 意識も眠らせてみる？

女2 ええ、眠りましょう。(眠る)

一時間三分が経過し、檜の丸太が目覚めました

女1 明かり、つけて。(明るくなる) 丸太がいる。何も変わってない。殺したい。

女2 眩しい。

女1 夢じゃなかった。私たちは丸太だった。(暗くなる)

女2 夢を見たわ。

女1 冗談でしょ？

女2 いいえ、丸太のなかで夢を見たの。まっ暗ななか川べりの道を散歩してた。右側は川の流れがざーってホワイトノイズみたいにつづいてて、左側は車がたまにさーって通るの。私は土手を下りて川に近づいた。そしたらいきなり後ろから大きな手が伸びてきて、口を押さえられて、横倒しにされた。川べりに置いてある石で頭を殴られてぼうっとした。まっ暗な川べりより幾らか明るい月空の逆光で象られた二人の男が私の体を挟むように立っていて、ひとりが笑いながら斧を私の首に振り下ろした、どうして目覚めなかったんだろう、もうひとりはこのぎりを私の腹にあてて挽いていた。痛みはなかったわ。

女1 どうしてそんな悪夢……

女2 夢はどうしようもないもの。

女1 丸太の中だし……

女2 あなたは見なかったの？

女1 疲れちゃったのかな、ぜんぶ、忘れちゃった。

女2 はい、「その接点」。

女1 まだ国語の授業やるのー？

女2 これしかないんだもん。

女1 はいはい、丸太の私の「いま」とからだの私の「いま」、「その接点」。

女2 言葉で、丸太の私の「いま」とからだの置いてけぼりにされた「いま」の「接点」に「触れる」のね。

女2 「にあるもの」。

女1 わかりません。

女2 「がここに現れます」。

女1 私にはからだが必要な。

女2 ええ、からだを「ここに現れ」させるためには？

女1 からだの私の「いま」を知る必要がある。

女2 「いま」どこにあるのかわからないからだの「いま」なんて……

女1 知らないことは思い出せないわ。

女2 いいえ、思い出せばいいのよ。からだがあったときのことを。

女1 それじゃ過去でしょ？

女2 過去になった「いま」が集まってからだの「いま」があるんだから、「いま」は「い

ま」の一瞬一瞬の連なりでしかないんだから……

女1 思い出せばいいのね。でも、さっき私は私のからだはまだあった……自分で言ってる

泣けてくる……八月五日の晩のことを思い出したのに、映画館も友だちもからだも現れな

かった。なぜ？

あなたは登場人物としてすでにここに現れています

女2 「その接点」は登場人物だった、と。

女1 私は登場人物になったから登場人物のことを思い出した、たしかにそう。

女2 また思い出せばいい。

女1 思い出せないのよ。

女2 丸太の私に何かがやってこないと思いつけないし、「接点」にならない。

女1 さっきみたいに話してるうちに思い出すかもしれない。

女2 そうねえ、ひとつずつ思い出して、思い出を連鎖させて……おうちのこと思い出せる？

女1 おうちがあったことだけは思い出せるけど、それがどんな屋根で、どんな中身で、ど

んな庭で、誰がそこに住んでいたかは思い出せない。(嗚咽とずるずる鼻をすする音)

女2 泣いちゃうよね。私もまったくそうで、何も思い出せないの。

女1 物覚えが悪いのは登場人物の特性だものね（ずるずる）丸太から涙にじみ出てるかしら（ずるずる）アメリカみたいに早送りでパツパツパツって紹介してくれてもいいじゃない（ずるずる）過去にもろもろがあっただけど忘れちゃったってことにしないと（ずるずる）私たちはただの白痴。

女2 リハビリが必要ね……自己紹介してみる？

女1 でも、この個人情報は私とあなた以外もアクセスできるのよね。

女2 個人情報なんてありふれてて事件がない限り誰も気に留めないし、誰もいないし、私たちはいま丸太だし、顔写真もない。

女1 システムはもちろん知りたいよね、もう知ってるかもしれないけど、知ってるなら教えてよ。

沈黙

女1 黙って守ってくれてありがとうございます。

女2 別にいいのよ、ナレーションしてくれても。

女1 私たちはどんな物語だって生きられるし。

女2 どうせ丸太だし。

女1 物語はたくさん持つてれば持つてるほどいいし。

沈黙

女1 うちのおじいちゃんは二次大戦の脱走兵だったの。おじいちゃんは頑固で無口だったからおばあちゃんから話聞いてね、誇らしかったわ、一方、パパは飛行機で飛び回ってほとんど記憶になくて、ママは私が六歳のときに男つくって夕立にぶつかったかげろうのように消えちゃって、私はおばあちゃんと仲良く暮らすようになった、でも十四歳の冬に、おばあちゃんが道で転んで頭打って死んじゃって、おばあちゃんは私をなんて呼んで

たの？ それからはもう何もかもヤになっちゃってクラブで踊り明かしたり誰もいない部屋で延々と映画観たりしてねバスター・キートンがヒーローだった私のバスターがほしかったけど現れなかった、ああもう限界だなんて思ったらとにかく外に出てしゃべりまくるの、少女の話しだったら誰でも聞いてくれるのよ、それと躁鬱、境界性パーソナリティ障害、ADHD、偏頭痛、不感症、不安神経症とかとか手当たり次第に症状を手に入れてってね、カウンセリングで仕入れるのよ、不安とか無とか空虚とかぼんやりしたものに症状の名前をつけてあげると落ち着くのよね、同級生のみんなは学校の教室とか塾の教室の空気で自分にまとまりを与えてたんだろうけど私はその空気に耐えられなかったから十七歳になる前の春にそのとき仲良しだったカエルくんと家出してスナックで引っかけた映画監督が使いたって言うから女優になってカエルくんは歌舞伎町のドラマって店のナンバー2になって疎遠になっちゃったし監督は交通事故で死んじゃったしで私はかわいそうな奥さんと一緒に目黒のマンションの二十三階で暮らして適当にモデルの仕事して一生懸命料理して毎日楽しかったわあ元に戻ったらクスクスつくってあげるね……そっから先はない。たぶん、私は三十歳ぐらい。

女2 あなたは少女漫画から引っ張られてきたの？

女1 私をぺらぺらの紙人形扱いはやめて。

女2 まあとにかく信じるわ。自分の名前は思い出せないの？

女1 うん。

女2 私も思い出せないけど、そんなことがあるもんかね。

女1 あるのよ、名づけ直さなきゃいけないのよ、きつと。

女2 ああ、サム。

女1 え？ なに？

女2 あなたはサムなの？

女1 たぶん違うと思う。いきなり名前思い出さないでよ。

女2 サムはことあるごとに私の名前を呼んでいたのに、それすら思い出せないなんて！

女1 都合よく消されちゃったんじゃない？

女2 神様、わたくしたちに名前をお与えください。

あなたたちは丸太です

女1 主述結合って残酷よね。

女2 ひどい物言いよ。

女1 もう質問なんかしない。はい、あなたの番。

女2 うちはお金がなかった。私は本もテレビもスマホもパソコンもなしで、いつもぼおっとまわりにあるものを眺めていた。パパはママといるときは常に暴言と暴力をふるっていて、とにかくその物音と声が耐えられなかった。うるさいの。それが世界の騒音だった。押入れに入って耳を塞いでもうるさい音はからだに入ってくる。私は家に帰りたくなくて、自分で居場所を作った。イオンのベンチ、公園のブランコ、市立図書館の閲覧室、ゲームセンター……でも夜は家に帰って眠らなきゃいけないでしょ？ ちゃんと眠るってことがどういふことなのか、よくわからなかった。ママは産まなきゃよかったとは言わなかったけど、パパは私の顔を見るたびにお前なんか生まれてこなきゃよかったんだって言った。パパは自分に言ってたのよね。だから、私は決して生まれてこなきゃよかったとは思わなかった。生まれてきてよかった。そのことに気づいたのが十五歳。長い人生だった。醜くて愚かで何の救いもない人生を、ありがとう、パパ、って、パパが泥酔してこたつの中で眠っているときに耳元で囁いて、黒いもじゃもじゃの毛でいっぱい耳の穴に包丁を突き刺した。やっと和解できた、十五年かかってやっと和解したの。パパはウツて言った。それが最後の言葉だった。せめて、私の名前を呼んでくれればよかったのに、もしたらいま思い出せるかもしれないのに……まあ、どうでもいいわ。私とママは庭にパパの死体を埋めた。ママはパパについて何か聞かれても、はい、あの人は蒸発しました、消えてしまったんです、私は何も知りません、って言った。たまには貧乏も役に立つのよ。ママはひとりで居間のソファに乱暴に放られたお人形みたいにならなく座って無音のテレビを眺めているときも、あの人は蒸発しました、知りません、知りたくありません

ん、ってぼそぼそ呟いてて、ある日、突然いなくなつた。ひとり取り残された私はやっと静かな家をもつた。ここに帰ってくれば外のどんな騒音も耐えられる。しあわせとかふしあわせとか抽象的なことはよくわからなかつた。ふわふわのメレンゲの風が透明でからっぽな私に吹きつけてきて真っ白なページがばらばらとめくられていった。サムと出会つて、私は初めて誰かといいた気がする。そこで終わり。たぶん、私も三十歳ぐらい。

女1 大変だったね。

女2 信じてくれる？

女1 私が信じないで誰が信じるの？

女2 そう。

女1 私には一つの人生しかない。

女2 それじゃ、ここにある丸太とさっきまでの人生は繋がっていると認めるのね。

女1 神様に取り扱い説明書を提供したまですよ。

女2 スポンサーを獲得するためのプレゼンよね。

女1 なぜ、何も現れないの？ 接点だらけじゃない。

あなたたちはいまに触れていません

女1 もういいかげんにして。

女2 どうしてこうなったのか、思い出せってこと？

沈黙

女2 もう私はこの思い出には戻ってこない。

女1 失恋したの？

女2 思い出して何か変わった？

女1 ああそうだ私はこうやって生きてきたんだっていう安心した。

女2 丸太の中で何が何だか分からないままいるよりはマシかもしれない。

女1 そうよ、きつとそう、そうに違いないわ。

女2 顔とからだはこの思い出はいまでも一致するのかな。

女1 丸太の中でも思い出せるんだもの、きつと戻ったら一致する。顔とからだを私に
戻してくれるわ。

女2 顔とからだはいまごろどこで何してるんだらう。

女1 それを知るために思い出したんだった。

女2 この思い出は私と顔とからだのものだったのに。

女1 顔とからだを私を思い出して、私に教えてくれるってことはない？

女2 どうやって？

沈黙

女1 テレパシーとか、想像力とか……

女2 期待できない。

女1 こんなに思い出せるんだから、昨日のことが思い出せないはずなのに。

女2 なぜ「あなたたちがいまに触れるとき、その接点にあるものがここに現れ」るの？

それが現実です

女1 私たちが思い出したことが現実じゃないって言いたいの？

沈黙

女2 どうしてこんなことになったのか、それさえわかればねえ。

女1 誰かのせいとしか思えない。

女2 ここにはいない誰かのせい、私たちを保護するとか言って勝手に選んだシステムのせい、つまり、神のせいね。

女1 システムエラー？

女2 システムが正常に機能しているひとつの結果がこれよ。

女1 神様、バグってますよ。私をおうちに帰して。元の楽しくもつまらなくもない日常に戻して。不満はたくさんあるけど単調な日常にもそれなりにおもしろ発見はあるから、だいたいよ悪いことはしない他人に迷惑をかけないがおばあちゃんからの教訓でこれまで私はそれなりに守ってきたの、ね、今日は誕生日じゃないけど、元に戻して。

沈黙

女1 三十年も生きてれば変な顔にもいびつなからだにも愛着が湧いてくるの、他と比較するのにも疲れてやっと認め合えるようになったところだったのよ、私の大きな二重の目、小さな鼻、薄い唇、すぐにごわごわになる強情な髪、必死に磨いたら白くなる歯、腕の鮫肌、どこに立って歩く力があるのかわからないふにゃふにゃの肉、風呂上がりのストレッチで矯正中だったけどユニークに歪んだからだ、うつろな私にまとまりを与えてくれるもの。そんなからだが好きだったひともいたの、助けにきてくれないけど。いま、私を救えるのはあなただけ。元に戻して。

あなたはこの暗い箱の中から、あなたの記憶の中にある自分の住む街を思い起こすとき、あなたがまったく自分と関係のない人々と似た檻に入れられ、似た食事、似た衣服、似た日課、似た顔で、毎日を過ごしていることを知るでしょう。あなたたちは、とてもよく似ています

女1 ふざけんじじゃないわよ、あなたたちって誰と誰と誰のこと？ 顔がないのにそうやすやすと思い出せると思う？ 似ててもよく見れば違いはたくさんあるのよ。丸太だってそ

う、一つとして同じ丸太なんてない。ああ、神様、恥ずかしいこと言わせないで……：檻には入っていたがるやつもいれば、入れられたがっているやつもいるし、入りたくないやつもいるの。

女2 あなたたちの物語とか言っておきながら案外積極的に参加してくるんですね、神様。

女1 ねえ参加するなら助けて。私は檻に入れられたくないの、檻に入れられてるって気づいたらすぐにそこから逃げ出したいの。お願い、神様、ここから出して。

沈黙

女1 システムが気まぐれに応答するのに、私たちは律儀に応答しなきゃならないの？ あんたが黙ってるなら私も黙るわよ。時間だけが過ぎて、何にも起きないわよ。

女2 私たちが黙っても「沈黙」で処理されて時間だけが無駄に過ぎ去っていくことになるからねえ……：さっきあなたが言った「編集」にとって沈黙は都合がいいの。私たちがその沈黙のなかで何を感じて何を考えていようが声に出さない限り、適当に処理される。沈黙は神のものよ。

大丈夫、ちゃんと聞こえています

女1 ほんとむかつく。

女2 システムは簡単な疑問になら答えてくれるかもしれない。少なくとも電気は点けてくれる。でも私たちが元に戻すプログラムはいまのところ存在しないらしいわ。私たちが作るしかない。

女1 じゃあ作りましょうよ。

女2 うん、作ろう。不平不満はなしね。

女1 何から始める？

女2 さっきあなたは転がってたよね。ここは水平みたいなのにどうやって転がったの？

女1 気づいたら転がってた。転がるときなんてそんなもんじゃない？

女2 転がろうって意志した？

女1 だから気づいたら転がってたの。誰かに転がされたんじゃない？ いま転がろうと

思ってもできないでしょ？

女2 いや、できる。いくよ。(杉の丸太は転がりだし、檜の丸太から離れる)

女1 ほんとだ。じゃあ、壁に当たるまで転がってみて。(杉の丸太はそのまま転がり、やがて停止する)

女2 聞こえる？ どこまでも広がる新世界よ！

女1 いいから。帰ってきて。(杉の丸太は転がり、元の場所に戻る)

女2 丸太には十分すぎる広さね。

女1 ご苦労さまでした。疲れた？

女2 からだがあるとしてからだにずっと「転がれ！」って命令してごらんさいよ。

女1 オート転がりモードにできないものかしらね。

女2 あと、目をあけてるとぐるぐると回る。丸太くんは転がっても疲れないみたい。少なからず削られるけどね。

女1 目を閉じて命令しつづけるかぎり、どこまでも転がっていけるのね。

女2 だいたい目がないのに目を閉じられるっていうのは何なの、ヴァーチャルなの？

女1 丸太の中にぜんぶ閉じ込められてるんでしょう、私たちヴァーチャルなのよ。

女2 丸太の表皮をばりばり剥いたら現実的な私たちが復活するってことはあり得るかな。

女1 丸太のなかに顔からだがあるわけじゃないじゃない、ヴァーチャルって言うてるでしょ？
う？ 魂の話よ。

女2 丸太の魂。悪くない。

女1 明るくして。(明るくなる)

女1 跡がついてるわ。

女2 神様がそう言ってたね。

女1 どうして跡をつけるの？ (暗くなる)

ここにあるあらゆるものが痕跡を残します

ばらまかれ、蓄積し、放出される放射線からその物体の持つ時間が測られるのです
あなたたちの痕跡もまた世界記録です

女1 世界のことなんか知ったこっちゃない私たちに関係あると思う？

女2 何も記録されないよりはましだと思います。

女1 ここはどれくらいの大きさなの？

世界から独立した箱の中の独立した風景というものはありません

この世界に置かれた透明な箱の中にいるあなたたちは箱の中の風景の一部であり、風景から
作用を受け、風景に作用を与えるのです

あなたたちが風景の大きさを決定するのです

女1 都合のいいときだけよくしゃべるわねえ。もしかして、勇気づけてくれるの？

女2 システムが意図を持って作動するとしたらそれは悪夢よ。

女1 システムが自分の制御する範囲の大きさを知らないなんてことがあっていいの？

女2 「透明な箱」だからね、まだ境界線は引かれていないんでしょう。

女1 風景の一部としての私はこんな箱、こんな風景を認めない。私を丸太に変えてしまう
ような出来事なんて認めない。

女2 こんな世界は消えてしまえばいい。

女1 私たちの物語なんてくそくらえ。

沈黙

女2 何も変わらないね。

女1 生半可にしないで。手加減なしでこの出来事を消去するの。心しくないんだからそれを心から望むの。

女2 やってみたよ。

女1 消えた？

女2 世界は暗いままで、丸太は丸太。望みは叶った？

女1 このやり方だと最後には自分が消えるしかないのよね。

女2 登場人物が消えるための典型的なパターンね。

女1 そして生き返ってまた死ぬその繰り返し、永遠の出口なし。絶対に嫌。

女2 丸太はどうやって自殺するんだろう。

女1 丸太は自殺しない。私たちは殺されない限り死なない。

女2 そう、好きなようにすればいい。

女1 転がるほかに何かないの？

女2 神とおしゃべりする。

女1 転がりながら神とおしゃべりするのね。

女2 それしかすることがない。

女1 それしかすることがない。

女2 話す丸太って変。

女1 だんだんいらいらしてくるのよね。

女2 表情がないからいらいらしてもわかんないよ。

女1 よく見たらあるんじゃない？ 怒ったら回転数上がる気がする。

女2 樹皮が膨らんだり、水分が蒸発しやすくなったり？

女1 何の助けにもならない。

女2 気にならない？ 相手がどんな人間なのか。

女1 うーん、あんまり興味ないわ。

女2 私はあなたがどんな顔でどんなからだで何を言っているのか知りたい。

女1 人間的なコミュニケーション。保守的だわ。

女2 丸太のコミュニケーション。ぶつかり合う。並んでみる。立つ。横になる。転がる。

女1 聞こえた声からイメージをくつつけて、それで十分よ。人間的なコミュニケーションは元に戻ってからにしましょう。

女2 さあ、また始めましょう。

女1 私たちの武器は、おしゃべりと転がること。

女2 お散歩しながら話そう。どっちに行く？

女1 方角なんてないのよ。あなたがどっちを向いているかすらわからないんだから。

女2 じゃあ、同じ方向にまっすぐ転がっていきましょう。

杉と檜の丸太は転がりはじめました

女1 ロード・ムービーが始まっちゃう。

女2 丸太が転がってるだけよ？

女1 ロード・ムービーなんて丸太に声がくつついてるようなもんよ。

女2 あなたが明るくて助かる、ずっとそのままできてね。

女1 絶対に嫌。

女2 もうそろそろ別の丸太に会ってもよさそうなものなんだけどな。

女1 できれば人間に会いたい。

女2 人間なんて！ 何されるかわかったもんじゃないわ。

女1 最後まで他の誰とも出会わないロード・ムービーなんてある？

女2 恋人たちは別れがくるまで誰にも出会わない。

女1 ロード・ムービーにラブを入れこまないで。

女2 物語を始めるなっていう教訓はどこにいったの？

女1 あなたが言ったように二本の丸太が転がっていくだけ。時計置いてきたけどいいの？

女2 時間は勝手に進んでぐるぐる回って爆発しちまえばいい。

女1 あの時計が現実と繋がってるかどうかもわかんないもんね。

女2 私たちは時間からも解放されたの。丸太は老けない。

女1 ねえ、だんだん明るくなってきてない？

女2 ああ、朝か。

丸太の回転数が上がると明るくなります

女2 私たち、発電してるんだね。

女1 もう怒る気力もない。

女2 怒りで回転数を上げるんでしょ。

女1 何かこう、力、抜けちゃって。回転数と明るさが比例するだなんて。

女2 馬鹿馬鹿しいにも程があるよねー

女1 楽しい話して。

女2 あなたの声を聞いていると顔が浮かんでくる。知らないのにね、不思議。

女1 どういう顔？

女2 知らない顔。今まで見たことのない顔。

女1 言えないぐらい変な顔なの？

女2 言ってしまったら絶対に間違ってしまう顔。

女1 つまんない。その顔に悪意ある他人が火をつけようとしたらどうする？

女2 私たちは転がって逃げるか闘うか選択する。

女1 やれやれ、ねえ、もしここが本当に舞台なのだとしたらシユールすぎない？ 丸太が

暗闇の中を転がっているだけよ？ 誰が見るの？

女2 こんなシステムを作り出したやつがいるように物好きはいるの。

女1 物好きのためにわざわざ？ このシステムが？ つくったやつを私は許さない。

女2 たしかに自然にこうなったとするほうが健全ね。

女1 いるかどうかも確かじゃない亡霊の神様に操られているとしたら？

女2 最悪。私たちはそいつを殺さなきゃ元に戻れない。

女1 殺されているようなものなら誰かを殺してもかまわない……恐ろしいことを考えつくもんだ私。いったい何を根拠に私って言ってるんだろう。

女2 私たちは丸太じゃない。

女1 死んだ魂になってふわふわ浮遊してるってわけでもない。

女2 あなたはいったい何を根拠にこれまで私と言ってきたの？

女1 顔でしょ、からだでしょ……あぐるぐる回ってる……意識を持つ前、ママのお腹の中に発生して、この世界に人間として生まれて、勝手に名前をつけられて、ママとパパとポチと鏡を見て、いつのまにか、何の疑いもなく私は私と言って、思春期にどうして私のパパとママは私のパパとママなのか本当は別のところに本当のパパとママがいるんじゃないかって思いもしたけど見つからなくて結局私は私で、殺したいと思う私も私、死にたいと思う私も私で、そうやって三十年ものあいだ試行錯誤してきた私を私は根拠にしてきたのにいま、私はその堆積した時間のうえにいる私を失って丸太になって、これは私じゃないのに私だってことにされてるけど私じゃない。

女2 それでもまだ私と言えるものがある。丸太が動いた痕跡、上に記録されている文字。

これが私たちの履歴で、アイデンティティよ。

女1 この線が私の新しい時間の痕跡？ このなかに私がいるの？ じゃあ私のからだは？ 顔はどこにあるの？

あなたたちのからだは丸太で あなたたちの顔は丸太です

女1 あんたには聞いてない。あんたが私たちを丸太に押し入れたみたいなの言い方ね。

沈黙

女1 やっぱり犯人がどこかにいるんだ。

女2 犯人探しをしたって手も足もないんじゃないやねえ。

女1 転がって体当たりよ。

女2 犯人がここにいるとは限らないし。

女1 わたしたちばかりしゃべってどうにかなるの？　しゃべるべきなのは神なんじゃないの？　何でもできるんでしょ？

沈黙

女2 神が神のいない世界を認めないようにシステムはシステムの外を認めない。

女1 「箱の外」って言った。外はある。

女2 じゃあこのシステムは別のシステムと接続可能というわけね。

女1 楽観的ね、敵対して排除するために想定してる可能性だってあるわ。

女2 接続しようが排除しようが接点はある。

女1 その接点に私たちを挿入する。

女2 そこに私たちの顔があるんだわ。

女1 ええ、そうに違いない。

女2 そうに違いない。

沈黙

女1 疲れた。

女2 疲れたね。

女1 暗闇の中をずっとぐるぐる回って、無駄なおしゃべりをして、神に怒って、徒労よ。

女2 神を殺すしかない。

女1 冗談でしょ？

女2 無視する。何も訊ねない。何も語りかけない。何も聞かない。

女1 本気であれを神だと思ってたの？

女2 神じゃないの？ 私たちを思うがままに動かして、しゃべらせて。

女1 あなたは思うがままに動かされてたの？ それもあれに？ 違う、あれじゃなくて、この場所に、この状況に動かされてたって言うならまだわかるけど、それも違う、どうにかしたいから、からだを見つけないから、ここから抜け出したいから動いてたの。少なくとも私はね。

女2 それは思い違いよ。私たちがいつのまにか丸太に押し込められたように、見えない力で動かされてるのよ。

女1 やる気がなくなるわ。やめて。

女2 これが私たちの物語で、宿命なの。ただ待つしかないの。

女1 じゃあ、あんたはここで待つてなさい。私は行くから。さようなら。(転がる)

女1 ほんとこれだからスポ根は……いつのまにかボールは友だちってことも忘れてヘタレちゃうんだから精神論の行先は死に決まってるんだから……ああもうほんと嫌、別の場所で人間として出会っても絶対に付き合いたくない、あ、これオフレコにしとい……ああいい、いい、なんで離れてまであんなヘタレのこと考えてやらなきゃいけないの、どこのどんなやつかも知らないヘタレ丸太、神を殺すとか言っちゃってほんと何様なの冗談もほどにしなさいよ……ごろごろごろ静かなここで聞こえるのはそれだけ……よく転がれるわねえ、もう百年以上生きてきたからだでしょ切られてもまだ元気でごろごろごろ……これぜんぶ記録されてるの、足跡がね、あなたが転がると道ができるのよ……私は昨日三キロメートル歩いた人間で今日はゼロ明日は三キロメートル、そうやってみんなのからだは死んでく、私はそうなの、安全地帯からはみ出したくないの……でもあなたはそうじゃない。どこまでもごろごろごろ……私はあなたに乗ってもうはみ出しちゃったのよ……さあさひとりでおうちに帰るのよころころ転がり帰るのよ……

女2 無鉄砲に行っちゃって……あとで泣いても知らないから……やっひとりになれた。見ず知らずの丸太がずっと横にいて怒ったり泣いたりしてんだもん、疲れるにきまって

る。使えるのはことばだけでどれも嘘くさく聞こえるし、何を言ってもしかたがないような気になって……もうあんながみがみ女の小言聞きたくない、ここでこうやってひとりで話しているぶんには嘘でも本当でもどっちでもいい、何の責任もない。丸太になってすっかり人間らしくなってしまったわ。早く人間に戻って非人間的に生きたいものねえ黙りこくって何考えてるかわからない顔をして丸太んぼうのようなやつになるの、比喻で留めておいてくれたら丸太の坊やもかわいいだろうに体をすり替えられたんじゃ……受けいれがたいわ。快樂も糞もない。サムと同じベッドでぐっすり眠りたい。私が丸太でなかったらやりたいことはたくさんあるんだけど。丸太が一本、じっと横たわっている。何も話す必要はない……退屈だわ、ひとりって。一本って。丸太を拒絶するのもひとりじゃ無理、無意味。空虚。神と話す？ 気が滅入るだけね……ここで暗闇のなかじっとしてても何も変わらないんだもの、転がるしかないわ。転がるのよ。線を塗りつぶして。(転がる) あのぼんやり明るいところに、二人で転がったほうが明るくなるのね、私にはあなたが必要なの。

女2 ただいま。(止まる)

女1 しっ……誰か来たわ。

女2 私たちが行ってるんだから私たちが来たんでしょ。

女1 誰か来た。

女2 強情ね。二人いる。

女1 一人で十分なのに。

女2 嬉しくないの？ 人間よ？

女1 あの二人が何してるかよく見て。

女2 薪割り。最悪。薪割りだなんて、夏よ？

女1 五右衛門風呂でも沸かすんでしょよ。

女1 ねえ、神様、どうということ？

木こりと狩人はここにやってきて ずっとここで働いています

女2 私たちがここに来る前から、ずっと？

木こりと狩人はここにやってきて ずっとここで働いています

女1 どうしてあの二人のいるところ、明るいの？ 転がってもないのに。

木こりと狩人は働いています

女2 はいはい。

女1 あの二人にもあんたの声は聞こえるの？

沈黙

女2 物分かりのいいやつらだと助かるんだけど。

女1 私たち、割られたら死んじゃうと思う？

女2 私は木の破片になっても生きてみせる。

女1 丸太が割られたら死ぬなんて理不尽にも程があるわ。

女2 死なないわ、きつと。

女1 怖くないでしょ？ 大丈夫よ。

女2 もしかして私を売るつもり？

女1 何がどうあってもラブストーリーに仕立て上げたいんでしょ？

女2 黙って見てみましょう。

木こり こう景気が悪くちな。(腰に巻いた手拭いで汗を拭う)

狩人 やってられませんわ。(薪を丸太にのせる)

木こり たたつ斬らなならん。(斧の先端を薪に挿し込む)

狩人 何を？

木こり 悪い国から来た人らをや。(斧を丸太に振り下ろして薪を割る)

狩人 脚は腕に、足は顔に、耳はてのひらに。(割れた薪を並べる)

木こり 誰が逃げられる？ 誰が？ どうしてえ？(斧を丸太から抜く)

狩人 1%が逃げる。(手拭いで汗を拭う)

木こり 九九%は逃げられない。(薪を丸太にのせる)

狩人 それで、どこに行くんだね？

木こり 皇居です。

狩人 名もなき花はない。(木こりは斧の先端を薪に挿し込む)

木こり 名づけられた花は見事に散った。(斧を振り下ろして薪を割る)

狩人 まことに思いが内にあると顔色に現れるもんでございますね。(薪を並べる)

木こり 登場人物の気持ちを考えなさい。(手拭いで汗を拭う)

狩人 アムウェイがくれた注射器をこっちに寄越しなさい。(薪を丸太にのせる)

木こり 今日びいったい誰を信用していいのやら。(斧の先端を薪に挿し込む)

狩人 世界は平和なしに始まったし平和なしで終わるだろう。(斧を振り下ろして薪を割る)

木こり パスワードが思い出せません。(薪を並べる)

狩人 ニコニコきらきらワクワク！(両腕を伸ばしたまま回す)

木こり 持ち時間ももう少ないな。(屈伸する)

狩人 ぼんやりしてると、ものが手からすり抜けていきよんで。(背中合わせになって相手の

の両腕に腕を絡ませ、背負う)

木こり ぼうっと防波堤見つめてたいわ。(交代して背負う)

狩人 あの顔がどうしても忘れられへん。(丸太に腰掛ける)

木こり 毎日、賭け金が目減りしていく。(丸太に腰掛ける)

狩人 最後の希望や。(つなぎの胸ポケットから煙草をとりだし、二本くわえる)

木こり もう帰ってくるな！（二本の煙草にライターで火をつけ、一本をもらう）

木こり 終わりあるものに終わりのあることを。

狩人 終わりなきものに終わりのあることを。

木こり アポカリプス・南無。

狩人 アポカリプス・南無。

女1 神様、あんまりじゃありませんか。

女2 ええ、あんまりですよ。

女1 ねえ、帰りましょう。

木こり さっきから声が聞こえるな。

狩人 ああ誰かがおれたちの噂してる。

木こり まだ残ってたか。

狩人 もうぜんぶ処理したはずだったのに。

女1 バレてるわ。

女2 ここで転がれば追いかけられる。

女1 闘うんでしょ？

女2 斧を持っている相手に？ 自殺行為よ。

女1 丸太は死なない。丸太もそう言ったわ。

女2 あなた、丸太とお話できるようになったの？ ねえ、神様、どういうこと？

沈黙

狩人 丸太だ。二本もある。

木こり 残ってたか。

狩人 忘れてたんだ、きっと。

木こり 小杉の、ええやつや。

狩人 こっちは檜だ。

木こり 家、建てられるかもな。

狩人 椅子と机もな。

女1 私たちを殺さないで。

女2 私たちは人間なの。

狩人 なんか言いよるわ、丸太が。

木こり そういう丸太もいたな。

女1 川の場所、知らない？

女2 川？

狩人 どうする？ また仕事増えたで。

木こり どうせわしらが処分するんだ。

女1 外に出たいの。

女2 もうここにはうんざりなの。

狩人 なあ、なんか言いよるで。

木こり そういう丸太もいる。

狩人 お前の知りたいか。

木こり 知らないな。

女1 言葉が通じない。

女2 転がりましたよ。(転がる)

狩人 ああ、ああ、転がりよる。

木こり ちゃんと掴んでおけ。

女1 暗くして。

女2 私たちの表示を消して。

暗くなります

狩人 暗くなりよったで。

木こり 丸太を押さえろ。

私はしゃべりすぎた。

ここでは何もうつろわない。

仕事、食卓、家族、電車、買い物、友人、テレビ、口論、お金、何も。

私は姿を見せようとしないうちにあなたに敬虔の念を持たないし、尊厳を認めない。

人間の想像力をあてにしないでほしい。

これが私の物語の終わりなの？

昨日の私は……昨日の私の顔は……昨日の私の顔はからだと……昨日の私はいない。

この断絶は見かけじゃない。

あなたの思いのままに。

私が救われても私は救われたとは思わないでしょう。

あなたはただ見ているだけだった。

私の問いに答えてくれるだけだった。

多すぎる沈黙とともに。

宿命？

あなたの秘密の中に。あなたがあらかじめ知っていた秘密の中に。

すべてが決定された、不自由な設定の中に。

あなたの思いのままに。

私をあなたの思いのままに現し、葬り。

私はただの丸太だった。

私は人間ではなかった。

からだを返せ。からだの私を返せ。

からだは動き、感じる。からだを返せ。からだの私は考え、意識する。
からだを返せ。何も記録するな。

それが私の結論です。

記録を止めてください。

作 松原俊太郎

演劇計画Ⅱ「戯曲創作」[S/F]「到来しない未来」（主催：京都芸術センター）
委嘱戯曲 第二稿（2018.09.01）



この作品はクリエイティブ・コモンズ 表示 - 継承 による国際ライセンスの下に提供されています。
本稿の上演・二次創作・改変・再配布について、許諾申請等は必要ありませんが、事業と戯曲創作の参考のため、京都芸術センター（e-mail: info@kac.or.jp）までご連絡いただければ幸いです。

※なお、平成30年度下旬に発表予定の決定稿については、著作者に断りのない使用・改変・再配布を禁ずるかどうかでの発表を予定しています。